

フロアスタッフの体験プログラム 年代や興味に合わせて選べ、 何度も来館したくなる工夫がいっぱい

ひとはくでは、来館される皆様楽しく学んでいただくため、フロアスタッフによる様々な体験プログラムをイベントとして実施しています。以下にその内容を紹介いたします。

■展示解説ツアー

ひとはくの展示を、クイズを交えて解説します。どなたにもわかりやすく、各展示の魅力をお伝えしています。

■デジタル紙芝居

自然史にまつわる紙芝居を大型スクリーンで実施しています。紙芝居はフロアスタッフ手づくりです。

■フロアスタッフとあそぼう

ひとはくに関連する工作などを、フロアスタッフと一緒に楽しく遊んで学べる体験プログラムです。

〈主なプログラム〉

「くるくるとぶタネ」

フタバガキのタネの模型をつくり、実際に飛ばして遊ぶことを通して、タネの不思議な構造が学べます。

「画はくの日」

ひとはくの展示や標本をじっくり観察しながら、スケッチします。展示や標本の細かいところまで観察することができます。



1. デジタル紙芝居 2. はかせと学ぼう「フジツボペーパークラフト」

■ワークショップ

小さなお子様でも気軽にご参加いただける体験プログラムを実施しています。

〈主なプログラム〉

「アンモナイト化石のレプリカづくり」

カラフルな樹脂粘土を使って、アンモナイト化石のレプリカをつくります。

「ティラノハット」

頭にかぶることができるティラノサウルスのお面をつくります。

■ひとはく探検隊

ひとはくの研究員を隊長に、館内や深田公園を探検します。

■はかせと学ぼう

ひとはくの研究員とフロアスタッフが実験や観察を通して知的好奇心を刺激するプログラムです。

共生のひろば だれでも参加可能な「人と自然」の博覧会

共生のひろばとは、当館と関わりのある人をはじめ、様々な立場の人が地域の自然や環境、地域づくり等について研究発表する、なんでもありの発表会です。毎年2月11日に開催し、2021年度には17回目を数えました。市民や小中高生が研究員にアドバイスを受けて調べた内容があれば、初めて接する人が発表することもあります。個人・親子・学校単位での参加や幼稚園児による発表もありました。内容も研究に限る必要はありません。標本展示からアート作品展示、活動報告、超難解な研究でも形式を問いません。様々な内容があることで、参加者どうしの交流が促進されて、この交流がきっかけとなり新たな活動にもつながっています。

2015年度までは当館の連携活動グループ等に限定した閉鎖的なものでしたが、生態研究部の担当となった2016年度からは、広く県内外の参加を呼び掛けて交流と参画をテーマとして開催しました(図3)。市民活動そのものが展示となることで、一気に来館者が増え、年間を通じて最も来館者数が多いイベントにまで成長し、同時に自然の魅力や面白さを伝える担い手づくりに貢献しています。また、発表内容は、



1. 2018年の開催の様子 2. 2020年度のオンライン開催の様子 3. 共生のひろばへの参加者数と来場者数の推移

冊子として取りまとめ、ホームページでも公表しています。

2020年と2021年は、オンライン開催となりました。特に2020年の開催は急遽、オンライン配信システムとポスター発表システムを自前で構築し開催することが出来ました。オンライン活用によって、遠隔地の方が気軽に発表できるといった点で好評頂きましたが、一方でリアルな交流がより一層望まれています。

発表内容をまとめた冊子の閲覧はこちらから
<https://www.hitohaku.jp/relation/kyousei-hiroba.html>

高校生のための生き物調査体験ツアー in 台湾 生き物調査を通じて 日台高校生の交流を促進

ひとはくでは生き物観察だけに絞ってみても、多種多様なプログラムを展開しています。そんな中で一般的な観察から一歩進み、専門家の指導のもとに野外で生き物調査の方法を学ぶ機会を高校生に提供しているのが本事業です。実施体制もユニークで、ひとはくと花博記念協会そして台湾の台北市立動物園が密接に協力しあって運営しています。

活動の舞台は台北市内郊外に広がる広大な動物園と、バスで2時間ほど離れた東眼山の自然公園の山の中です。動物園といっても日本とは規模が違い、園内には広大な亜熱帯低地林が広がっています。この2ヶ所で昼と夜の昆虫観察、コウモリトラップを使ったコウモリの観察、あるいはキノボリカゲの食性調査法の見学などを行います。標高900mの涼しい東眼山では昼間はコケやキノコ、高等植物の観察、夜はライトトラップとカエルの鳴き声観察を体験します。

2016年の第1回から2019年の第4回まで順調に開催されたのですが、残念ながら2020年は中止に。しかし2021年は全国に広く参加者を募集し、日本と台湾そして



1. 第1回の時の集合写真 2. コウモリ調査の様子 3. 東眼山でのライトトラップ 4. ツアー実施のあと、ひとはくで開催された事後学習会

各家庭をネットで結び、講師による実習の様子を伝えるWEB講演の形で開催しました。

このプログラムのもう1つの特徴は、日本人高校生だけでなく台湾からも20名の高校生が参加することです。日台の高校生間の国際交流も毎回大いに盛り上がりがあります。参加者は、お互いの意志疎通のためにはたとえ語学が得意でなくても、まずは話しかける積極性が大切なことも、体験を通じて実感しているようです。

ひとはくユーザーに向けた情報発信手段の工夫 多言語対応とSNSを活用した 情報の提供

ひとはくでは、博物館からの情報を多様な形でわかりやすく発信できるように、次のような取組を進めてきました。

■館ナビ

2019年、来館者向けサービスの一つとして、「館ナビ」というスマートフォンアプリを利用して、詳しい展示解説が閲覧できる情報システムを本格導入しました。このアプリを起動させた状態で展示物に近づくと、該当の展示解説画面が自動的に表示される仕組みになっています。さらに、日本語による解説だけでなく、英語や中国語、韓国語にも対応しています。今後も来館者に広く活用していただけるように、コンテンツ拡充などの取組を進めていきます。

■音声ガイド

2020年度、県立美術館・博物館魅力発信事業の一つとして、展示解説などの音声ガイド(日本語版・英語版)を作成しました。これにより、目が不自由な方にでも博物館の展示内容などを知っていただけることが可能となりました。プロのナレーターによって作成した音声ガイドは、ホームペー



博物館入口に掲示している「館ナビ」案内ポスター(左から:英語版、中国語版、韓国語版)

ジや「館ナビ」アプリで聞くことができます。

■SNS

2021年3月、博物館からの情報発信をより活発に行う目的で、公式SNS(Social Networking Service)として、【Twitter】と【Facebook】の運用を開始しました。
①【Twitter】企画展やイベントなどの案内を中心に情報発信を行っています。 <https://twitter.com/hitohaku/>
②【Facebook】案内情報に加えて、研究員自らが投稿者となって館内の近況などを紹介しています。
<https://www.facebook.com/hitohaku/>

このように、各SNSの特色に応じた情報発信の工夫を行っています。今後も、ひとはくのファンとつながり合える情報ツールとして、積極的に活用していきたいと考えています。